

自主シンポジウム 17

「子ども中心主義保育」への問い

司会者 鈴木牧夫（玉川大学） 企画者 宮里六郎（熊本学園大学）
 話題提供者 鈴木牧夫 宮里六郎 渡邊保博（三重大学）
 指定討論者 丸尾ふさ（元白金幼稚園）

<企画主旨>

幼稚園教育要領、保育所保育指針が改定され8年が過ぎた。「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育要領のあり方」など、要領の見直しも始まっている。

保育現場では、保育者がいないと遊べない子、まるで3歳児のように乱暴な子など、様々な問題を耳にする。改定された要領や指針では、「子ども中心主義の保育」が強調され、受容主義的な保育観や一人一人を大切にすることが求められている。しかし、受容が放任になったり、集団をくぐらせずに個が尊重された結果、前述のような問題がおこっているのではないだろうか。

本シンポジウムでは、発達研究の立場で自我論を中心に鈴木牧夫、保育指導論の立場から実践記録の分析をもとに宮里六郎、保育目標論の立場から「生活」の視点の重要性を渡邊保博の3氏が問題提起を行う。さらに、長年研究的な視点で実践にかかわり「つぶやきにドラマを見いだして」などの実践記録も公刊している丸尾ふさ氏に指定討論者として議論に加わって頂き、「子ども中心主義の保育」を深めとらえ直すきっかけにしたい。

<自我の発達から考える>

鈴木牧夫

子どもを取り巻く状況は、早教育的な傾向や管理的な傾向を強めている。このような傾向は、子どもの主体性・自主性、社会性の育ちを疎害している。「子ども中心主義の保育」は、このような状況を克服しようとするものであるが、「時代に対応した今後の幼稚園教育要領」に見られるように不十分なものであった。

発達研究からとらえると、現状を打開するためには、知識・技術の詰め込みに偏した一面的な能力発達観に対峙して心情・意欲・態度を重視する発達観に立つのではなくて、両者を統合した人格発達の視点に立つことが必要である。

心理学では、人格発達と言うとき、人格の核になるものとして、自我を想定する。南博は、G・Hミードに学んで自我を主体的自我と客体的自我に区分した。日本人は、自我が弱いといわれるが、それは主体的自

我が関与する自己主張の働きである。日本人は、主体的自我が弱い分だけ客体的自我が肥大化して集団の中で自己抑制して集団依存主義的な行動様式を身につける。柏木恵子は、幼児の自己主張と自己抑制の発達に関する研究を行っている。「拒否・強い自己主張」「遊びへの参加」「独自性・能動性」という三つの因子からなる自己主張は、4歳後半まで急速に発達していくのに、それ以降は伸び悩んでしまうこと、それに対して、「遅延可能」「静止・ルールへの従順」「フラストレーション耐性」「持続的対処・根気」という4因子からなる自己抑制は、3歳から学童期に達するまで伸び続けることを明らかにしたことである。

現代の子ども・青年は、わがままで耐性が弱いと言われるが、そのことから耐性をつけるために我慢の機会をつくるというように一面化するのではなく、自己主張を認めつつ自己抑制の機会を保障することが必要なのである。自我の発達を促すためには、子どもの遊び活動を保障することが不可欠であることが遊び研究から明らかになりつつある。遊び研究は、従来、J・ピアジェの研究に見られるように認知発達の側面から研究された。最近の研究動向では、河崎道夫や加用文男は自我の変容を楽しむという視点から研究を進めている。子どもたちは、役割遊びやルール遊びで群れ合いつつ自己主張したり、自己抑制して自我を鍛える。能力発達と関係性の発達を統合した人格発達の視点に立って、子どもに子どもらしい生活を保障する大人たちの配慮が不可欠である。

<受容と要求の関係から指導を考える>

宮里六郎

改定された要領や指針の指導論にはいくつかの特徴がある。第一に、指導を「強制」ととらえ、指導を排除もしくは消極化して「援助」を強調していること。第二に、受容すれば子どもの自主性が自然に生まれるという自然発生的な発達観を根底に、指導が受容に還元されていること。第三に、「個々の子ども」「子ども一人一人に応じ」など個への配慮が強調される反面、集団的な視点が後退していること。総じて、子どもの主体性と保育者の意図的指導が対立してしてとらえられ、二者択一な指導論に陥っている。

特に、受容と要求の関係では、受容を、「子どもの感情や要求、願望など、子どもが心の中で経験していることを、子どもの立場にたって共感し、理解し、それなりの理由のあることとして認めることではあっても、決して子どもの個々の行動すべてを是認し許容することではない」（高垣忠一郎）とするなら、受容は、放任ではないし、要求と対立することでもなく、かえって要求へ発展していくものである。このことを保育実践の中で確かめることこそ「子ども中心主義の保育」を問い直すことになるのではないだろうか。

以上のような問題意識にたって、丸尾ふさ氏の実践記録「つぶやきにドラマを見いだして」（幼稚園3歳児）の分析を通して考えてみたい。『大変デス！誰カガイタズラシテイマス』では、「同じいたづらでも竜夫のような3歳児らしい好奇心から出てくるもの、こうやったらこうなるだろうという予測がたたないためのものは、好き勝手に放任されてきたためのやりたい放題とはちがうので、叱言やお説教ではなく受け入れたうえで方向づけが必要」だと述べている。このように、何を受容し何を禁止するか区別し、受容した上で方向づける働きかけこそ、受容か要求かという二者択一的な指導論を克服する方向が示されているのではないだろうか。『ネエコンドハコウヤロウネ』では、「まずさりと問題を投げかけてみて、その出方によって個々に変えていかねければならない」というような働きかけをしている。目的を達するまで意図的に働きかけ続けるか、見守るかの二者択一ではなく、働きかけてみて、その反応から次の働きかけを探る、出方をみる働きかけを実践の中で意識化していく必要があるのではないだろうか。『ツマラナイネ、イツモ奈美チャンバツカリ』では、ボスの奈美が自分のいうとうりにならないと「一ヤンベ」と抜けていくとすかさず「あら奈美ちゃんやめるんだって　じゃあみんなでここ広くして遊んだら？」と奈美に一人になる経験と周りの子にも奈美がいなくても遊べる経験をさせようとする。また、奈美が遊びに戻ろうとすると「こうなったらもう先生は入っていない方がよいと思い、何気なく他の場所に移動」し、奈美と友達が直接交渉するチャンスをつくる。仲間を通して一人を変える働きかけが見られる。

このように、受容か要求（指導）か、集団か個かという二者択一的にとらえるのではなく、受容と要求、集団と個の間をていねいに構築していく作業が子ども中心主義の指導論を深めることになるのではないだろうか。

＜教育と生活の関連から考える＞

渡邊保博

改定された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」が、子どもの自発性・主体性をきわめて重視していたのは、周知の事実です。

そこには、いろいろな背景や要因が絡んでいましたが、子どもの主体性が重視され子どもの主体的な活動が可能になる環境構成のあり方と「援助」的かわりが保育者に求められていました。「保育者主導」の保育は否定され、「指導」は後景に追いやられました。その点で、要領や指針の保育目標・方法（意識）を、「子ども中心主義の保育」の系譜の一つに位置づけることができるかもしれません。

とはいっても、こういった＜子どもの主体性－援助＞という目標・方法（意識）は、教育的観点からのものです。例えば、「指導」か「援助」という問題は、子どもの主体性や主体的活動にかかわる「教育」方法論としての善し悪し（もちろんあれかこれかということではないでしょうが）を問うたものではなかったでしょう。

もちろん、保育所や幼稚園が、子どもの教育の場であり、意図的・計画的な教育活動を通じて子どもたちのすこやかな育ちを保障しようとするかぎり、こういった議論が生産的に展開される必要があるでしょう。と同時に、保育所は、「生活の場」でもあるということからすると、保育者と子どものかわりを「教育」的観点からみるだけではすまされないことになります。生活の目的、生きる喜びや「生活の充実感」は「教育」できるものでしょうか。一緒に生活しながら共感したり、共有したりしていくものではないでしょうか。つまり、「指導」か「援助」かという枠組みで論じられる性質のものではないでしょう。あるいは、「教育」の目で子どもを見ると、子どもが主体的に生活・遊びを繰り広げていくことに期待します。でも、「生活」者として子どもを見ると、家族の生活を背負っていてもいる子どもが、時として甘えたりすねたりいらだったりすることがありますが、それをどう受けとめていけばいいのでしょうか。また、日常の園生活の中で保育者と子どもがちょっとしたことに共感したり雑談を楽しんだりすることをどういう目標・方法概念で受けとめていけばいいのでしょうか。こういったことは、保育者は「先生」なのかという問題にも関わってきます。